

武蔵野美術大学の大学院で彫刻に没頭していた三谷薫子さん(29)がその不思議な求人に出合ったのは今から4年前のことだ。

「リメイク家具のデザイナーを募集しています」

一体どういう仕事なんだろう。想像がつかなかった。でも「造形の知識が生かせる絶好の機会かも」と胸が躍ったのを覚えている。

求人を出したのは、1902(明治35)年に創業した東港金属など、廃棄物の処理、リサイクルを手掛

水説 sui-setsu

赤間 清広



「デザイン」という魔法

ける複数の会社を傘下に持つ「サイクラーズ」だ。

サイクラーズグループにはオフィスチェアやデスクなど日々、企業から出た大量の廃棄品が持ち込まれる。まだ十分に使えるようなものも少なくない。

廃棄され一度は価値がゼロになったものでも、デザイナーが新た

な価値を吹き込めば立派な商品として再生できる――。

三谷さんはこんな期待を背負いサイクラーズのデザイナー第1号として2022年に入社した。

最初に手掛けたのはテーブル。廃棄される予定だったものを引き取り、色を塗り替えて会社のサイ

トで売り出した。間もなく、購入

者が現れた。デザインの力を認められたようで身震いした。

千葉県内にある倉庫の一角に、「エンループ」と名付けたリメイク家具の工房がある。

三谷さんがリーダーとなり、23年入社の島田ひろさん(26)と、24年入社の東條鈴菜さん(23)も専属デザイナーとして加わった。2人とも同じ大学の後輩だ。

倉庫は元々、リサイクル品の保管場所だった。一部が壊れてしまっても、使える部分を組み合わせ

ればすてきな商品に姿を変える。例えば運送中に傷がつき、商品にならなくなった大理石の天板。椅子やベッドの脚をつけ、一点物のオリジナル家具に仕上げた。

工房の壁には、倉庫から見つけ出した「使えるようなもの」がずらりと並ぶ。それをどう生かすか。3人の腕の見せどころだ。

限られた資源を有効活用する「循環型社会」への移行を迫られる企業にとって、廃棄物をいかに少なくするかは喫緊の課題だ。

エンループにはいま、さまざまな企業から引き合いが殺到している。7月に65年の歴史に幕を下ろした東京・銀座の映画館「丸の内TOEI」からは長年、館内で使われてきたスクリーンや座席を家具に再生させる打診を受けた。思い出を未来につなぐ大仕事だ。

廃棄品にもまた、それぞれに歴史が刻まれている。3人が魔法をかければ、止まったはずの時計が再び動き出す。
(経済部)